

瀬戸内、しまなみ海道、今治側よりひとつめの大島にこの教室を立ち上げる
ことになった。2003年4月のことである。

それまでの数年間 ワシはひたすらある作品の構想を抱きつづけてきた。そ
れは 子どもや年寄りやふつうのオトナたち、つまり新しいひと古いひとそし
て古くなりかけた人達らが、おのおの経験や知恵を、まあいわばそれぞれの歴
史や文化や世界観のようなものを互いに持ち寄り、それらを伝えあひまたとも
に学びあいなどできる、そういった場としての イレモノづくり に関するこ
とだった。

やがてワシは【教室】というカタチでこれを表現していこうと思いたったので
ある。

それとまた、わが教室づくりにおけるコンセプトのひとつとして、-----それ
はこの外観からも容易に想像されるとおり-----昭和30・40年代あたりま
では、日本の各地でごくふつうに見られた「木造校舎のある風景」への強い憧
れと郷愁が込められてもいる。

当時は、ワシもほんのハナたれ小僧だったが、そもそもこのニッポンの国自
体がどっちかといえは まだまだ できかけであり ずいぶんと不便だったり
貧乏だったり、今時分とくらべれば もう恥ずかしいぐらい無いもんだらけで
しかもインチキだらけ、ただし蠅や蚊や、野良犬 野良猫だのはすごくたくさ
んおったし、また将来への夢や希望みたいなものも ほんとうに恥ずかしいほ
ど めいっぱいあったもんだ。

ともあれ当時には 「かつての日本の風景」と呼べるものがまだそここに
ちやんと残っておったし、ワシら自身のなかにも ある種の豊かさが、そうた
やすくは金銭に換算しきれない価値観が備わっていたわけだ。

ところが今どきのニッポンときたらなんたる有り様か、夢もなければ希望も
なくて、あるのはただはてしない欲望と、それをさらに上回る物質文明の利器
ども、巷にはあふれんばかりのケータイ、コンビニ、抗菌剤にコンピューター
か。なんでも有りの売り放題に買い放題、目先の欲に目は眩み便利や快適のみ
の追求、それらを せっせと買い求めるため、金・金・金の拝金主義に全身全
霊どっぷり漬かり込み 疑うことすら知らずな超恥知らずぶり。

貧乏がいやで不便がいやで、当時の大人たちは遮__無二がんばり駆け続けた
ことだろう。欧米の豊かな暮らしむきを羨み、庶民的なレベルの和風や鄙びた
趣の類いは あたかも恥ずべきものとしてどしどし捨て去られた。だれもが、
それは「幸福」へ向かう旅だと信じた。子どもだったワシらも 漠然とだが夢
や希望を胸に抱きながら後をついて行った。

やがてもうかなりなオトナにワシらになったころ、「こりゃなんかチガウぞ。このままではヤバイぞ。」と勘づきはじめて人らも実際は少なからずおったはずだ。われわれ日本人一行がめざしてきたところは単に「裕福」でこそあったが、けっして「幸福」そのものではなかったからだ。

けれどいっぽう それを幸福と同一視し錯覚してしまう者らもおれば、もともと裕福を実感することこそが至上の価値と信じ込む者らもあり、というかそっちのほうが圧倒的に大多数であったためか、本来ならばその時点でもう既に、あらゆる意味で少なくとも速度をおとすべきタイミングであったにもかかわらず、結局そのままのスピードでか あるいはいっそう加速し さらにさらに先へと突っ走った。

そのあげく、わがニッポン丸は（と、ここは船にでも例えるのがわかりやすくてふさわしかろう）やがてバブルな燃料も底をつき、大半の乗客は心からだに醜くぜい肉の救命胴衣をまとったまま、暗礁に乗り上げてしまったわけだ。

ようよう皆が気づくときがきた。われわれは なにかとてつもなく重大なものを置き去りにしたまんま、もうこんなにもはるか遠くへまで来すぎてしまったのではなかろうかしらん。

わがニッポンは 今や欧米以上にはなはだしく欧米だ、もちろん悪い意味で。

とはいえ、通り過ぎた時代をことさらブームみたいなことにしたてあげ、ただただ懐かしんでばかりおってはいかん。われわれは今こそ決定的に決定的な方向転換のときをむかえた。得手勝手の野蛮な発展や進歩にゲタを預けきったままズルズルと前向きに生きてゆこうなんぞといった ふぬけた迎合的な態度はきっぱり悔い改めねばならん。ゆるぎない後ろ向きの構えで、われわれが置き去りにした大切なものを取り戻すために、この来すぎた道を「かつての時代」へまで逆戻りする旅に向かわねばならん。

そうしたスローガンにより「できかけの時代へ逆もどる できかけの乗りもの」として この教室はデザインされた。単に懐古趣味をのほほんと満たすための表現ではない。ここからさらに失われた夢や希望を再スタートさせることが、もうひとつのコンセプトになる。

また ハコづくりの具体的な素材には、新しいものと 古いもの古くなりかけたものも同時に採用していった。そうやって この教室は行き先を設定し、ひとりでにこのようなカタチになっていった。ワシの思い描いた「できかけ教室」は今後もますます できかけになっていくのだった。（つづく）